

献呈の辞

学部学生が卒業論文の提出を終え、口述試験も終わると、ゼミナールで議論を交わした学生たちももうすぐ卒業していくのだという感慨にとらわれます。それ以上に、長い間ともに同僚として働き、あるいはさまざまな教養をいただいていた先輩たちがご退職の時を迎えると思うとその寂寥感はいやまに強まってまいります。文学部の時代から、あるいは人間科学部においてこの10年間をともに過ごしてきた心理学科の山上精次先生と村松励先生がご定年で退職されることは、本当に残念です。以下両先生の略歴をご紹介しますとともに、個人的な思い出を記すことで、退職記念号の献辞とさせていただきます。

山上精次教授は東京大学文学部を卒業後同大学院に進学され、1977年から2年間東京大学心理学教室で助手を務められたのち、1979年に専修大学文学部に講師として赴任されました。その後助教授、教授と昇格され、2010年にはご自身が設置準備に関わられた人間科学部の創設とともに人間科学部心理学科に転籍されました。本学における山上先生の教授歴は実に30年を超えます。

山上先生の研究業績については後出の業績一覧をご覧ください。大学院時代から毎年のように研究を積み重ねて来られ、著書、研究論文、学会報告は数知れません。また日本心理学会で理事をお務めになるなど、日本における心理学の発展に大いに貢献されてきたと伺っております。

学内では、文学部で心理学科長などを歴任されてのち、2014年から4年間にわたって人間科学部長をお務めになりました。そこでは前任者から引き継いだ人間科学部を安定的かつ公正に運営するという大変困難なお仕事を成し遂げられました。

山上先生に関する忘れえない思い出があります。まだ本学に着任したばかりの駆け出し教員のころ、私はゼミナールの運営に悩んでおりました。夏休みのゼミ合宿を学生に提案しましたが、学生は乗り気ではなく私も弱気になっておりました。山上先生にゼミの状況をお話ししご相談しましたところ、破顔一笑、「ゼミ合宿には3年生はもちろんのこと4年生も皆参加するものだよ。就職活動などでどうしても来られない学生はビデオで参加しますよ」と答えられました。それに意を得た私は、学生をゼミ合宿に参加させるのではなく、来たいと思わせるゼミを普段から構築していくことが重要だと気づかされたのです。これが音に聞こえた「山ゼミ」だということを知るのは後年のことです。

村松励教授は東京都立大学をご卒業後、長らく家庭裁判所の調査官などで実務につかれ、その後2000年に本学商学部に助教授として入職されました。その後ネットワーク情報学部を経て、人間科学部の創立とともに心理学科に転籍されました。主要担当科目は犯罪心理学で、長い実務経験を生かしてのご研究、教育を実践されてきたのだと思います。

村松先生の詳しいご業績については後出の業績一覧をご覧ください。家庭裁判所調査官としての経験を生かして、一貫して少年非行などの問題を取り扱ってこられたことが理解できます。また学会活動では日本犯罪心理学会会長をお務めになったことも大きなご功績です。

学内では心理相談室長、キャンパス・ハラスメント対策室長などを務めてこられました。ことに2015年から2年間のキャンパス・ハラスメント対策室長のお仕事は激務だったのではないかと思います。この間、ちょうど私も対策室員として一緒に働かせていただきました。毎月のように持ち込まれる相談や申し立ては、それぞれが人間くさく、簡単には白黒のつけがたい案件ばかりでした。それらについて、揺るぎのない的確な判断を常に下すことができたのは、村松先生のご経験に裏打ちされてのことだったと、いまでは拝察するばかりです。

このような先生方が今年度をもって教壇を去られることは人間科学部にとって大きな痛手です。しかし両先生

が専修大学に残していかれる豊かな土壌の上に、人間科学部が大樹としてしっかりと根を張り、豊かな枝を伸ばしていくことをお約束して、『人間科学論集心理学篇』退職記念号の両先生への献呈の辞とさせていただきます。

平成31年3月

専修大学人間科学部長 嶋 根 克 己